

若手サラリーマンの信条

第12期OB 北島 大輝

ご無沙汰しております、北島です。早いもので、社会人生活も2年目を終えようとしています。苦勞していたはずの事務作業も難なくこなせてしまい、理解に苦しんでいた会議もそれなりに理解できるようになってくるものなのですね。こうして振り返ってみると、入社当初の赤ん坊みたいな自分を懐かしく思えてなりません。今回は、この2年間で形成された2つの信条について記述していきます。

1つ目は、「仕事はレギュラー争い」です。私はeMMC・UFSというスマートフォンやTV、自動車に搭載されるメモリの生産管理を任せていただいております。といっても、他の製品担当者の方も私の担当業務を担うことはもちろん可能です。野球チームに投手が複数いて、彼らはボールをある程度のスピードで、ストライクゾーンに投げるという点に関しては大差ないということです。しかし、そんな中でもジャイアンツ戦であれば、阪神は下柳剛を使い、中日は山本昌を使います。それと同じように、私もeMMC・UFSなら北島に任せるといってこの2年間やらせてもらっています。技術的な問題が起きれば、それに対するアクションをどのようなスケジュールで実施していくか、営業推進部は客先にどのような対応をとっているのかということまでヒアリングしては、関係各課の資料を読み込む毎日です。担当製品を任せられているからには、しっかりと事実関係の把握をし、整合を図っていきます。それができなければ、他の製品担当者に担当製品を奪われるぐらいの危機感を持つようにしています。

2つ目は、「AIに勝つ」です。昨今技術の躍進は非常に目覚ましく、自動運転やフィンテック、インシュアテックというようなAIが進行しています。10~20年後には、日本の労働人口の49%はAIにとって代わられると試算されています。大半の事務作業や型にはめたような提案であれば、AIにでもこなせてしまうということです。AIにはできない高度な意思判断を成せるような人材にならなければならないということです。具体的には、課題発見力・解決力を身に付ける必要があります。その自負があるから、先述のとおり、関係各課で起きている問題を把握し、整合を図ることを心掛けています。事務作業をこなすことも大切ですが、それ以上に自分の意思を仕事に反映させることに重きを置いて働く必要があると考えます。

2年目が偉そうに仕事を分かりきっている感じで駄文を書きましたが、これらは事実であると思います。常に危機感を持って働くことが求められています。その危機感を保持しつつ、3年目も走り、更なる成長を図っていきます。ゼミの後輩に抜かれぬよう、先輩に追いつけるようなビジネスパーソンになりたいものです。小野ゼミもまた成長を後押ししてくれるような要因の1つであると思えてなりません。短いですが、ここで筆を置きます。では、また来年。



第 13 期同期会にて、小野先生にワインを注ぐ著者



同じく第 13 期同期会にて、小野先生と肩を組む著者